

講演「人事は悩ましく、面白い」

追手門学院大学地域創造学部

泊 吉実

人生、何があるか分からないと、つくづく思いました。職業人生の最終盤、還暦を前に大学で教える立場になろうとは夢にも思いませんでした。よく聞かれることがあります。

- ① 何を教えているのか
- ② どれぐらい教えているのか（授業の回数）
- ③ 新聞社から大学に来たのはなぜか

この三つに答える形で話していけば、「人事は悩ましく、面白い」という講演のタイトルにつながっていくと思います。タイトルについて別の言い方をすれば「還暦前の大挑戦」、あるいは「還暦前の無謀なチャレンジ」といったところでしょうか。この4月、まったく知らない大学の世界に入り、講義をしてきました。前期（4～7月）の授業です。

- ① 2年生演習（交通まちづくり、9人）
- ② 新入生演習（大学での学び、19人）
- ③ 地域文化創造研究B（文化行政、252人）
- ④ 地域文化創造研究C（文化行政、190人）
- ⑤ 社会人の基礎（キャリアデザイン、29人）

地域創造学部の大テーマは「まちづくり」「まちの再生」です。①の「2年生演習」は、バスや電車などの公共交通を軸に人優先のまちづくりを目指す「交通まちづくり」を考えるゼミです。カッコ内の数字は学生数です。②の「新入生演習」は大学での学びの基礎を身につける科目です。読むこと、書くこと、発表すること、情報技術の使い方を学生たちは学びます。私が学生のころにはなかった科目ですが、情報技術の進歩などで、必要になってきたのでしょう。③と④は同じ授業です。文楽と上方落語を素材に補助金交付などの文化行政はどうあるべきかについて考えました。⑤の「社会人の基礎」は4年生を対象に、社会に出る準備を整えてもらうものです。時事を学ぶとともに、自身の職業観について考える授業です。

追手門学院大学の教員が担当する授業の基準は「6科目6コマ」、つまり6科目を持ち、90分の授業を週に6回行う（6コマ）ものです。私は初年度ですから、大学側に「今年は4科目4コマ」としてもらえないかと、伝えていましたが、実際の担当は「4科目5コマ」、大学と私、双方の考えを足して2で割った形になりました。

「90分の授業を週に5回行っている」と説明すると、反応は二つに分かれます。一つは「それだけ？ 楽でいいなあ」というもの。小中高は1日に5回、6回の授業がある、大学は90分と1回の時間は長くても週に5回だからという受け止め方です。もう一つは「大変だなあ。大丈夫か」というものです。

覚悟はしていましたが、正直、大変でした。教科書がないものですから、毎回、講義を

組み立てて、レジュメやパワーポイントといった資料を作る必要があります。4月のスタートを前に準備をしてきたつもりですが、すぐに自転車操業に陥りました。週に5回、原稿の締め切りがくるようなものです。前期、これを15週続けなければなりません。本を3冊、4冊読み、同時並行でいくつかの講義を作る必要に迫られたこともありました。「ほんとに講義ができるのか」。そんな不安から、脂汗をかいて夜中に目が覚めることが何度もありました。

しかし一方で、新聞社で経験したものとは違う、達成感ややりがいを感じました。学生たちの存在です。例えば、地域文化創造研究など学生が大人数の授業では、学生とのやり取りがしにくいので、毎回、その日の授業について自分の意見や質問、感想を書いてもらい、授業の後にそれを読み、いいものをピックアップして次回授業の冒頭で解説し、あるいは答えるようにしていました。中には、理解の深さが私の想像を超える意見があります。他の学生の意見を知り、ものの見方は様々であることが分かったし、自分がまったく気づかない点を指摘する意見もあり、悔しかったと書く学生もいます。「今日の授業は分かりやすく面白かった」と書く学生もたまにはいます。そんな内容のメモを見つけると、来週も頑張って授業をしようと思うのです。学生たちに勇気づけられながら、何とか前期の授業を乗り越えてきた。それが正直なところです。

では、なぜ新聞社から大学に来ることになったのか。読売新聞大阪本社の編集局総務だった昨年4月、会社側から打診がありました。「追手門学院大学の教授の話があるが、どうか」。総務の主な仕事は、編集局長を補佐して日々の紙面制作を指揮することと、記者たちの人事、危機管理です。教授の話は青天の霹靂<sup>へきれき</sup>でした。大学から会社に人材がほしいと要望があった、大学は、学生を大切に社会で生き抜く力をつけてくれる人を求めていると、会社側から説明がありました。そして、なぜか私が適任ということになったようです。読売新聞大阪本社から追手門学院大学に出向し、60歳の定年を迎える2017年4月で読売を退職して大学に残るといふものです。

「そうか、私を出すんだな」と一瞬、複雑な思いにとらわれました。「何か悪いことをしたかな」「そもそも大学で教えることなどできるのか」「しかし、人事だから断る訳には」……。様々な考えが頭の中を巡るうち、「待てよ、これはとてもいい話ではないか」と思えてきました。将来のある学生たちに直接、働きかけることができる。私の経験や語る言葉が少しでも彼らの力になれば、これほどうれしいことはない。職業人生の最終盤に思い切ってチャレンジする価値はある——と、胸が熱くなったのを覚えています。結局、15分ほどで、会社側に快諾の返事をしました。

追手門学院大学は大阪府茨木市の丘陵地にあります。今年、創立50年です。経済、経営、地域創造、社会、心理、国際教養の6学部、学生6500人です。第1期卒業生に芥川賞作家の宮本輝氏がいるほか、女子ラグビー、チアリーダーが有力です。学校としての歴史は古く、1888年（明治21年）、大阪城の三の丸近くに創設された大阪借行社附属小学校が前身です。1940年に中学校、50年に高校を開校。66年の大学に続いて6

9年には幼稚園を開園しています。

私が所属する地域創造学部は昨年4月に新設されました。観光、経済、文化の3コースから「まちづくり」「まちの再生」を考えます。広範な知識を深めるとともに地域に入り込む実践型の学習に特徴があり、まちの情報を収集・分析し、問題点を見つけて解決する力を養っていく学部です。

大学の準備をとということで、昨年6月、編集局総務から編集委員に異動となり、大学への提出書類を作りました。新聞社で何をしてきたのか、詳細な記述を求められました。書いていくうち、印象に残る島根のニュースが結構あることに気づきました。記者生活34年のうち7年間を松江支局で過ごしています。島根の出来事を中心に、経験してきたことをお話しします。

① 山陰豪雨（1983年7月）島根県西部を時間雨量90ミリの集中豪雨が襲い、死者・行方不明者が107人に上った。

夏の高校野球島根大会決勝 大田5—3大社（全国大会 PL学園3—0横浜商）

私は大学に入るのに道草を食っているのです、この年は記者2年目です。「9人行方不明」の段階で、現地に入り、浜田通信部の取材班と合流するよう指示を受けます。中古のカラーで国道9号線を西に向かいます。「バケツをひっくり返したような」とは、このことだと思いました。今では、時間雨量が100ミリを超えることはそれほど珍しくありませんが、当時、90ミリは大変な数字でした。山陰中央新報の連載のタイトルが「90ミリの恐怖」だったことをよく覚えています。

浜田市街地に入る手前で、9号線は完全に冠水状態です。カラーを道路脇の少し高いところに乗り捨て、バッグとカメラを担いで道路を歩き、浜田通信部に入りました。水が引くのを待ってカラーを取りに行き、取材に回りました。ちょうどその1年前に、死者・行方不明者299人を出した「長崎大水害」があり、その時、注目された現象が「土石流」です。雪崩のように岩や土が流れ落ちる現象です。今は「土砂災害」と言われますが、まさしく、そんな現象が各地で起きている。集落が消えた現場にも行きました。当時は携帯電話もファクスもありません。ポケットベルだけです。公衆電話を探して着払いで松江支局にかけ、電話で原稿を送りました。豪雨から一転、悲しいほどに青い空の下で、厳しい捜索活動が続いた光景を今でも思い出します。

この年は高校野球の担当だったので、数日後、野球取材に転戦しました。大社は森井一須藤のバッテリーを軸に強いチームでしたが、残念ながら大田に逆転負けを喫しました。甲子園取材も経験し、優勝したのは、1年だった桑田・清原のPL学園です。

② 荒神谷遺跡（1984年8月）広域農道建設に伴う調査で発見された。銅剣358本、銅鐸6個、銅銚16本が出土。銅剣の全国出土数合計300本を一か所で超えた。

夏の高校野球島根大会決勝 益田東6—2浜田（全国大会 取手2—4 PL学園）

担当の先輩記者の指示を受けて現地によく足を運びました。静かな里山が多くの歴史フ

アンでゴった返していました。銅剣の数の多さに加え、銅鐸、銅鉾も出土し、北九州中心だった弥生時代の青銅器研究が見直しを迫られる大発見だったのです。

この年も高校野球を担当しました。益田東は野村というスライダーのいい投手だったことを覚えています。前年の水害を克服しての甲子園。そんな視点で連載も書きました。

- ③ 日航機墜落事故（1985年8月）乗員乗客524人のうち520人が死亡し、4人が負傷した。18時羽田発大阪行き123便。被害者には、坂本九、中野肇（阪神球団社長）ら著名人やその関係者が多かった。

夏の高校野球島根大会決勝 大社2—1益田東（全国大会 PL学園4—3宇部商）

墜落現場は群馬県の御巢鷹山ですが、生存者の中に大社の川上慶子さんがおられました。群馬の病院から松江赤十字病院に転院した川上さんが退院される時、病院で開かれた記者会見に出席し、原稿を書いたのです。この事故では「圧力隔壁」「ダッチロール」といった言葉が印象深かったですし、異常の発生から墜落までに機内で書かれた様々な遺書が胸を打ちました。

この年は、阪神タイガースが21年ぶりに優勝、巨額詐欺商法で問題になった豊田商事の会長が刺殺される事件もありました。高校野球は大社が接戦をものにし、22年ぶりの甲子園出場を果たしました。

- ④ 加茂岩倉遺跡（1996年10月）農道の工事中に次々と銅鐸が出土。総数は39個に上り、一か所からの出土数としては最多の大発見となった。

夏の高校野球島根大会決勝 益田東3—1開星（全国大会 松山商6—3熊本工）

入社年からの4年間に続き、1994年春から97年春までの3年間、松江支局に勤務しました。この3年間のうち2年間は次席＝デスク（支局員に取材を指示、原稿をチェックして地方版を中心に紙面を制作）でした。6日後に小選挙区制による初の衆院選を控え、バタバタしている時に突然の発表がありました。文化財は調査を終えてからまとめて発表するのが普通ですが、事件事故と同じ「発生モノ」でした。日を追うごとに銅鐸の数は増え、銅鐸に描かれたシカやトンボなどの絵画、文様が明らかになっていきます。それぞれが重要なニュースなので1面や社会面に出稿します。そんな状態が年内いっぱい続きました。荒神谷遺跡に続いて加茂岩倉遺跡という郷里の大発見に関わり、大変でしたが、出雲は特別なところなんだと、誇らしく思ったことを覚えています。

余談ですが、出土現場から銅鐸1個を記念に自宅に持ち帰り、水洗いして保管していた人がいました。連日の報道で、持ち帰ったものが大変なものであることがわかり、加茂町に返しに来る騒ぎもありました。

- ⑤ JR脱線事故（2005年4月）兵庫県尼崎市のJR福知山線で宝塚発同志社前行き快速電車が尼崎駅手前のカーブで脱線、転覆してマンションに激突。乗客106人と運転士が死亡し、562人が重軽傷を負った。

夏の高校野球島根大会決勝 江の川5—1大社

（全国大会 駒大苫小牧5—3京都外大西）

J R福知山線は、兵庫県東部を経由して大阪と京都・福知山を結んでいます。篠山や三田、西宮のニュータウン、宝塚方面から多くの通勤客、通学客を大阪方面に運びます。私は当時、三田に住んでいました。社会部の次長（デスク）でした。勤務は休みでしたが、抱えている仕事があったため、少し遅く J R新三田駅に向かいました。電車は動いていません。会社に電話をしても「尼崎で事故が起きたらしい」としかわかりません。代替のバスで宝塚に出て、阪急電車を使って会社に着くと、「阪神に行ってくれ」という指示があり、現場に近い阪神支局に入りました。以降2か月間、通うことになります。

捜索活動は4昼夜続きました。これまでにないことがありました。兵庫県警が被害者の氏名をなかなか発表しません。聞けば、遺族の承諾を得た人しか発表しないという。これほどの大事故では前代未聞のことです。氏名の発表されていない負傷者宅に記者が取材に行くと、「なぜ名前がわかった。個人情報保護法違反で訴える」と、たびたび強い抗議を受けました。当事者から話を聞くことはとても重要です。被害者の人となり、遺族の思いを聞かなければ、事故の実相を伝えることができません。負傷者の証言を集めれば、生死を分けた要因を検証し、対策を提案できます。実際、そんな検証記事も載せました。兵庫県警の対応や負傷者の抗議の背景には、事故前の4月1日に全面施行された個人情報保護法があったと考えます。法の目的は情報の悪用を防ぐことであり、報道機関への情報提供は適用除外なのに、社会全体に過剰なほどに「個人情報」の保護を求める空気が強まっていたのです。後にそれは、ところによっては町内会の名簿も作れない「匿名社会」へとつながっていきます。

一方、亡くなった子どものことをきちんと書いてほしいという人もいます。この事故では16大学の学生24人が亡くなりました。彼らが語っていた夢を写真と共に実名で伝えた記事があります。多くの夢を奪った大惨事であったことをこれほど強烈に訴えた記事はないと、思っています。

高校野球島根大会のカードとスコア、どこかで見たことがあると思ったら、1975年、昭和50年の山陰大会決勝と同じでした。私たち28期の3年の夏です。

こうした新聞記者としての経験をまとめ、大学に提出すると、2度の面接を通じて大学が求めているものもよく理解できました。学生を大事にしてほしい、力を伸ばしてやってほしいということです。

18歳人口は、1992年の205万人から2014年には118万人に減っています。しばらく横ばいが続きますが、18年から減少します。一方で、大学の数は1988年の490校から2015年には779校に増えています。特に私立の増加が目立ちます。進学率が高まったからでしょうが、とても多すぎて「淘汰の時代」に入っています。関西の私立は、「関関同立」を頂点としたランクがあり、偏差値50前後の分厚い中間層を受け入れる追手門学院大学は、強い危機感を持っています。以下、追手門の試みです。

#### 【教育の質の向上】

- ① 教員の意識改革→すべては学生のために
- ② 実務家教員（大学外で実務経験を積んだ教員）の増員
- ③ 年俸制の導入
- ④ 学生による教員評価
- ⑤ 授業の相互評価（教員間）

#### 【規模の拡大】

茨木市街地にある東芝工場跡地6万4400平方メートルの敷地に2019年春、新キャンパスを開設→新学部を設置し、学生を8千人～1万人に増やすことを目指す

従来の教員には「大学は学生のためにある」という意識が乏しかったと経営トップは認識しており、公言しています。その認識の基に教員の意識改革を強く求めています。具体的な対策として実務家教員の増員、年俸制、学生による教員評価の導入などがあります。「偏差値」という物差し、「偏差値」を絶対視する見方は捨て、大学の4年間に社会で通用する実力を学生たちにつけてほしい。これが経営トップの考えだと認識していますし、正しいと思っています。記者としての能力と学歴とはまったく関係ないことを、私は身をもって知っているからでもあります。

では、こうした改革の流れの中で、私は何ができるのかと考えます。専門は「地域学」と「新聞学」です。地域学の中でも、公共交通を軸にした人優先のまちづくりを目指す「交通まちづくり」が主要テーマです。新聞学はメディア論です。新聞をはじめとするメディアの歴史、メディアの課題などがテーマです。これに加えて、私の経験を最も生かせるのはキャリア教育ではないかと思っています。

#### 【キャリア教育】

##### ① キャリアデザイン

自分の職業人生を自らの手で構想・設計＝デザインすること。言い方を換えれば、仕事を楽しみながら高い成果をあげる——こうした職業人生を送るにはどうしたらいいか考えること。

- ・自分にできることは何か、得意なことは何か
- ・自分は何がしたいか
- ・自分は何することに価値を感じるか

具体的には、上記3点について自問自答を繰り返すことで職業観を描かせ、その実現に必要なことを考え、実行に移すよう指導する。

##### ② 基礎力をつける

すべての仕事に共通する力が基礎力。これを高めることでキャリアの成功率が高くなると言われている。

- ・対人能力＝豊かな人間関係を築く力
- ・対自己能力＝自身の感情を制御する力
- ・対課題能力＝課題を見つけ、解決する力

### 上記3点を一言で言い換えれば、考える力、表現する力、人間関係を築く力

進路を急いで明確に、具体的にする必要はないと考えます。むしろ、じっくりと基礎体力をつけるという考え方でいいのではないのでしょうか。人生、何があるか分からないですし、考えも変わります。早々に決めた進路に固執するより、力を蓄えて柔軟に対応する方がいいと思います。考える力、表現する力をつけるのに、新聞は有効です。記事を読み込み、ニュースのポイントをつかみ、要約する。記事に対する質問を書きだし、それをテーマとして調べる。こうした課題を授業の中で繰り返しこなすことで、考える力、表現する力を伸ばせると確信しています。地域創造学部が多く採り入れているフィールドワークは、情報収集・分析力、コミュニケーション能力、表現力を実践の中で高める効果があるはずです。

追手門学院大学の学生たちは、どちらかと言えばおっとりしています。その分、伸び代は大きいと考えており、力がついていることを学生たちが実感できるような指導をできればと思っています。

#### 【後期授業】（9月から1月）

- ① 情報文化論
- ② 地域創造実践演習（2年生ゼミ）
- ③ 日本語表現
- ④ 地域交通・都市交通論
- ⑤ 地域創造実践演習（1年生ゼミ）
- ⑥ 地域文化創造演習（テーマ：茨木市ゆかりの川端康成）

後期の授業は、前期より1科目増えて6科目6コマです。盆明けから講義の準備を始めます。また、悪戦苦闘が始まります。早晩、自転車操業に陥るでしょうが、学生たちの反応に時々元気と勇気をもらいながら、初年度の授業を何とかやり終えて、大学での土台を作りたいと思っています。講演のタイトルではありませんが、後に心底「面白かった」と言えるようにチャレンジしていきたい。そう思っています。もし、もしもパンクして、こちらに帰ってきた時には、どうか温かく迎えてやってください。よろしくお願いします。

ご静聴、ありがとうございました。

以上